長寿医療センターの今

池田恭治

IRYO Vol. 60 No. 12 (750－751) 2006

キーワード ナショナルセンター，理念，基本方針

平成16年3月，国立療養所中部病院長寿医療研究センターは，病院と研究所が一体となった国立長寿医療センターとして生まれ変わった．センターのホームページ（http://www.ncgg.go.jp）にもあるように，総長のもと

“私たちは高齢者の心と体の自立を促進し，健康長寿社会の構築に貢献します”

というセンターの理念と5つの基本方針（表1）が決定され，これを円滑に進めるために総長直属の運営部も置かれている（図1）．

病院では，病院長・副院長のもと，外来診療部，先端医療部，機能回復診療部，包括診療部を含む12部門が整備された（図2）．研究所では，研究所長・

表1 国立長寿医療センターの5つの基本方針

1．人の尊厳や権利を重視し，病院と研究所が連携して高い倫理性に基づく良質な医療と研究を行います．
2．病院では高度先駆的医療，新しい機能回復医療，包括的・全人的医療を行います．
3．研究所では老化と老年病の研究，新しい医療技術の開発，社会科学を含む幅広い研究を行います．
4．老人保健や福祉とも連携し，高齢者の生活機能の向上をめざします．
5．成果を世界に発信し，長寿医療の普及に向けた教育・研修を行います．

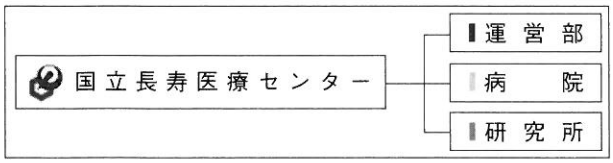

図1 センターの組織（HPから抜粋）

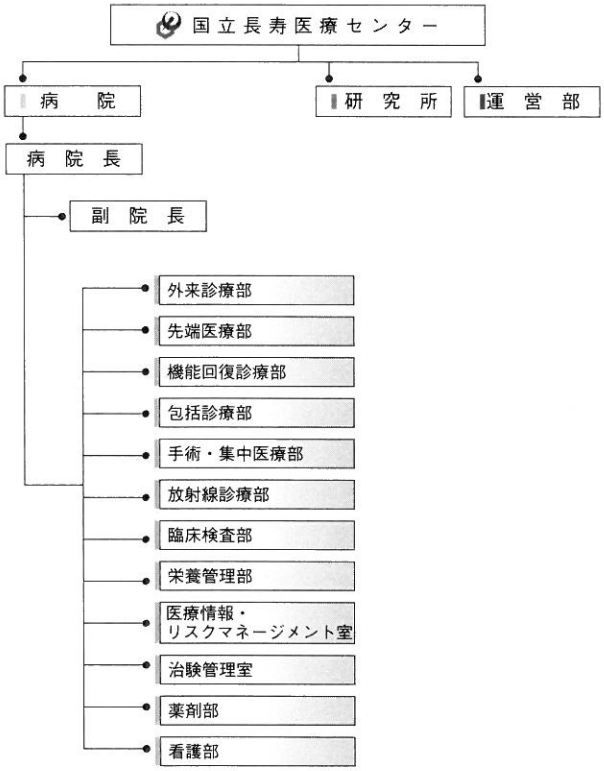

図2 病院の主な組織（HPから抜粋）

国立長寿医療センター研究所 運動器疾患研究部
別刷請求先：池田恭治 国立長寿医療センター研究所運動器疾患研究部 〒474-8511 愛知県大府市森岡町源吾36－3
（平成18年6月13日受付，平成18年9月21日受理）
National Center for Geriatrics and Gerontology Kyoji Ikeda

図3　研究所の主な組織（HPから抜粋）

副所長以下，図3に示す13の研究部と，研究所全体に共通の基盤機能を担う5省令室が開設された．

わが国で6番目の，また最後のナショナルセンターとして発足して以来，早2年が経った．前回，4年前の本特集では“加齢医学の現況と展望”と題して，包括医療，骨折，介護などのテーマを取り上げ，当時ナショナルセンターをめざしていた病院および研究センターの取り組みの現況を紹介した．今回は，新しい組織に着任されたばかりの新進気鋭の先生方に“長寿医療の最前線”について執筆していただいた．

がんや循環器といった特定の疾患あるいは臓器・系統を専門とするナショナルセンターと異なり，長寿医療には多くの疾患群が含まれ，介護保険などの社会的問題も大きな位置を占めるために，対象や目標もあいまいになりがちである．当事者であるわれわれだけでなく，医療全体からしてもまた国民レベルでも，少子化が急速に進むなかで今後どのように健康寿命を保証していくのか，たいへんむずかしい問題であり，22世紀に向けての大きなチャレンジである．

発足後2年と船出をして間もない当センターは，今岐路に立たされている．独立法人化の波が押し寄せ，人員削減のロードマップにのっている．中期計画の作成を終え（概要はHPに公開），今後はその達成度合いによって業務内容が評価されようとしている．基礎系の研究資金が絶対的に不足しており，とくに新しく発足した部・室にとって当面の大きな障壁となっている．資金，資源，人員が削減されるからこそ，正確な現状認識の上に立って，焦点を絞ったプロジェクト・目標の選択，将来への明確な方向性の打ち出し，綿密な研究計画の立案と実行が求められている．大学でも企業でも厚労省でもなし得ないような，そして国民が願うミッションを果たすことが求められている．国立長寿医療センターがこのような歴史的な岐路に立つなかで，今回の特集が，われわれがめざす目標と方針を明確にし，医療に携わる本誌の幅広い読者からのフィードバックを受けるきっかけになれば幸いである．